

中山間地域における住居の形式および使い方の現代的様態に関する研究
—宮崎県椎葉村K地区を事例として—

建設工学専攻
住環境計画研究

ME12024 賀根麻由美
指導教員 清水郁郎

1.はじめに

1.1.研究背景・目的

ある場所で自力建設される住居のつくりや使い方はその地域独特の様態を示す。これらには、気候や地形、生業や信仰、そしてその土地で取れる材料等の与える影響が大きい。一方、近年の急速な経済成長で人々の仕事や交通手段は著しく変化した。それにとともに、上記した住居の形式やその住居内での生活のしかたも大きく変化してきている。では、ある地域でこれまで「伝統的」と呼ばれていた住居の実態は、果たして現在でもそう呼ぶことができるものなのであろうか。このような疑問を背景に、九州山地の集落を事例として、住居の形式およびその使い方の現代的な様態をあきらかにすることを本研究の目的とする。なお、隣接する2つの集落における人々の暮らしを比較することで、現在中山間地域が抱える課題を考えるとともに、住居の本質的に変わらない性質を探ることを目指す。

1.2.研究方法

宮崎県東臼杵郡椎葉村におけるK地区の2集落(Kw集落、Kz集落)を調査対象とする。平成24年と25年に約2週間ずつフィールドワークを実施し、住居・屋敷等の実測ならびに住民への聞き取りを行った。

1.3.本研究の位置づけ

椎葉村の住居及び生活についての既往研究として、1987年の持田照夫の報告が挙げられる。この研究では、同氏の提唱する侶態論を元に、農村住居内生活を①生産生活②家事生活③接客生活④家庭生活の4つに分類し、分析を行っている。しかしこれらに関わる行為の比重は時間の流れとともに変化しており、現代的様態とそぐわない部分が出てきていると予想される。そこで、本研究ではこの分類を参考にしつつ、根本的に①～④に対応しない生活が現在の農村住居の中にあらわれている可能性も視野にいて研究を進めていく。

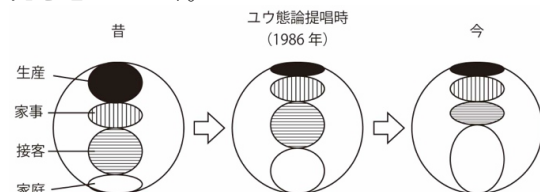


図 1 農村住居内における行為の比重の変化

2.調査地の概要

2.1.集落の概要

椎葉村は宮崎県の中でも北西部、耳川水系上流部の九州山地に含まれている。村の総土地面積は53,620 haで、そのうちの約96%が林野面積である。村の人口に占める農林業就業者数の割合が高く、かつては焼畑農業が盛んに行われていた。また、平成3年には村内26地区に伝わる「椎葉神楽」が国の重要無形民俗文化財として認定を受けている。

Kw集落は、国道265号線沿いの耳川上流に位置し、住戸数は全体で19戸ある。国道と河川に沿って、山の斜面にわずかに切り拓いた細長い段状の土地に山を背に、山に沿うようにして住居が建てられている。ほとんどの住民が田畑を所有しており、主屋とは別に農機具等を収容する付属屋が敷地内に建てられている。一方Kz集落は、国道265号線から分岐する山道をのぼった場所に位置し、Kw集落からは車で5分ほどの距離にある。住戸数は全体で11戸あり、Kw集落の住居が国道沿いに一定の間隔で立ち並んでいるのに対し、Kz集落の住居は一戸一戸が山の中に点在している。集落の中には神社と舞殿が建てられており、毎年11月の終わりから12月の頭には、近隣集落の人々も集まり、夜神楽が行われる。

2.2. 椎葉村の「伝統的」住居形式

椎葉村の中心部にある那須家住居は、約300年前に建てられたとされる。古くから椎葉に伝わる鶴富姫の伝説の舞台ともなった場所で「鶴富屋敷」という愛称で住民に親しまれている。建物のつくりは、住居全面に縁を横一列に設けそれに各部屋を配置した横長のいわゆる「並列型」の形式をとる。この住居は、椎葉の代表的な造りとして昭和31年に国の重要文化財として指定されている。

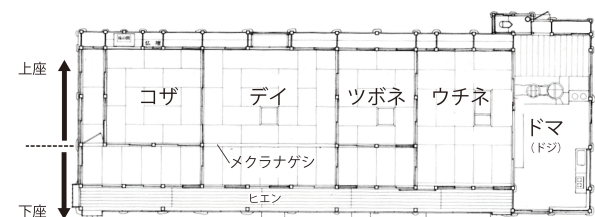


図 2 鶴富屋敷平面図

居室の縁側から一間のところメクラナゲシと呼ばれる敷居が渡されており、昔は身分の低い者はその敷居を越えて座ることが許されていなかった。各空間には呼び名があり、以下に各空間の特徴を記す。
ウチネ：家族が囲炉裏(ジロ)を囲みながら、食事、団らんをする空間。

ツボネ：夫婦の寝室。お産の際にも使用された。住居の規模によりツボネがない場合もある。

デイ：住居の中で最も広く、通常は客間として使用される空間。その他にも冠婚葬祭等、多人数が集まる際に使用される。

コザ：神棚、仏壇をまつり、住居内では最も神聖な空間として最奥にある空間。かつては女性が入室を禁じられていたと記された文献もある。

聞き取りを通じてKw集落とKz集落でも、同様の呼び名があることがわかった。よって、鶴富屋敷はこの地域の典型的(伝統的)住居形式であるということができる。

3.現在のK地区における住居

住居の間取りの変化としては、水場の屋内化→ドマ→コザ・ウチネ→（デイ）の順で変更が行われ、最終的に住居の建て替えが行われると推察される。

4.空間構成の変容

「伝統的」住居の基本的な間取りを残す住居でも、増改築のしかたによって空間構成に違いが生まれている。さらに世帯構成や生業の違いにより、各住居の生活と空間の使われ方は居住者自身が思う以上に多様となる。また、同時にみえてくるのが「普段使われない空間」の存在である。インタビューを通じて、コザやデイが生活の中でほとんど使われていない住居が複数存在することがわかった。この傾向は、Kw集落よりもKz集落に顕著に表れている。その原因として、Kz集落の方がKw集落に比べて高齢者の夫婦または単身世帯の割合が高いことが挙げられる。高齢者世帯では、食事を行う場所や普段よくいる場所の近くに就寝場所が設けられる傾向がみられた。つまり居住者は、住居内で使用するスペースを集約し、最小限の動きで生活を行っているのである。したがって、トイレや炊事場などの空間を中心として生活が行われる。そのため、ウチネやドマを改築してつくられた空間で就寝することが多くなり、コザやデイを日常生活で使わなくなるのである。

築50年未満の住居などではデイが変化したと思われる空間に仏壇を置くことで、完全にコザとしての独立した空間が住居の中から消えている。また、居室の細分化・居住者の減少がおこった際に生活が旧ドマ空間周辺に集約されることでデイも日常生活で使われることが少なくなっている。

ここで、分析を通じて見えてきた現在のK地区における住居の空間構成のモデルを提示する（図3）。

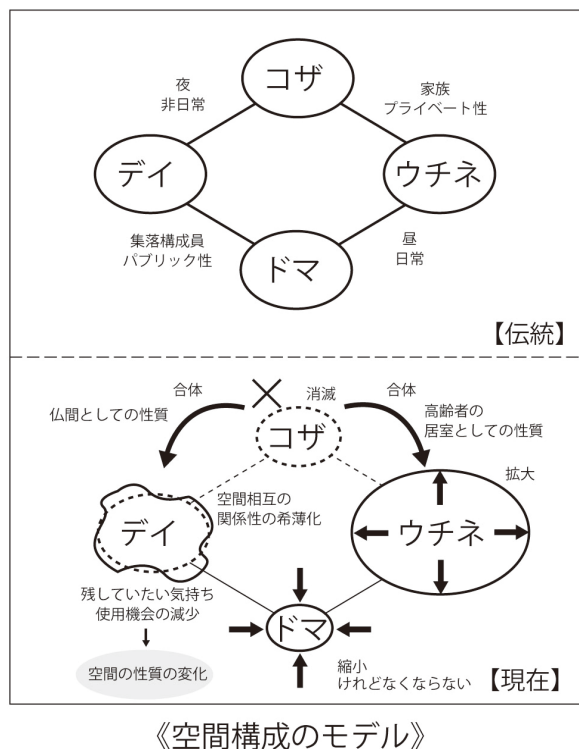


図3 伝統的住居と現代的住居の空間構成比較

増改築や建て替えが行われた際に、ドマであった部分の面積は縮小する。しかし、農林業を生活の一

部としている以上、土足で利用できる屋内空間は決してなくなる。その一方で、床上化された空間は炊事や生産以外の機能を果たし、ウチネの要素をもつ空間が拡大する。また、そこには比較的プライバシー性の高い、個人の居室もつくられる。伝統的住居においてコザは高齢者の居室や、家族人数が多い場合の就寝部屋などにももちいられていた。しかし、ウチネの拡大や居室の細分化によって、コザへの生活のあふれだしが減った。本来、この土地の住居は各空間が機能を持ちながらも、隣り合う空間の機能を補完しうるつくりになっていた。しかし、その必要性がなくなったことにより、空間が使われる機会が減り徐々に姿を消していったのである。

一方で、デイに関しては大きな改築があまり行われていない傾向が見られた。それはこの空間が、人が集まるための空間であり、居住者のためというよりも、集落のための空間という側面が強いためではないだろうか。従って、たとえ機会が減少しても人が集まることあるかぎり、間取りの変更がされにくい空間であることがわかる。そこに、農村民家としての住居の特徴を強く読みとることができる。

5.現在の中山間地域における住居をとりまく事象

デイではあまり間取りの変更が行われていないと述べたが、デイ空間の性質自体は変化してきている。その原因の1つが、儀礼の外部化である。典型的な例が神楽である。もともとデイで行われていた神楽は、現在はKz集落の神楽殿で行われている。しかし、その空間の使い方は、伝統的住居のデイで神楽を行っていた時の使い方を踏襲している。また、近年Kw集落では村外部に向けてそばまき体験などの企画が行われている。それをきっかけに農家民宿ができ、村外部からの客を泊めるなど、住居やデイ空間の新たな使われ方が生まれている。したがって、これらの事象も今後、中山間地域の住居における空間の変化の要因となりうる可能性をはらんでいる。

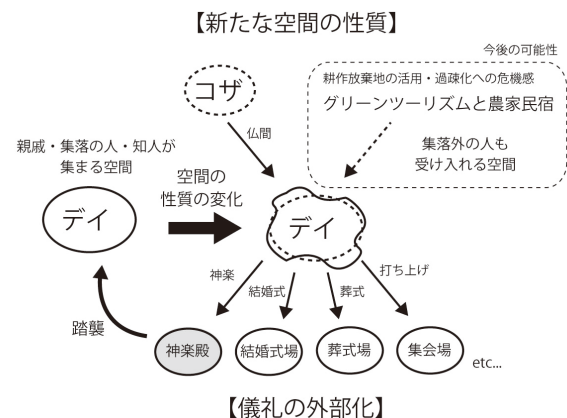


図4 デイから見る住居と住居をとりまく事象

このように中山間地域における住居は集落や社会の事象からも影響を受け現在の様態を成すのである。

参考文献

- ・持田照夫『佝態論』生活科学研究所、1986
- ・持田照夫他『横一列型住居に見られる空間構成の規則性に関する研究』昭和61・62年度日本建築学会近畿支部 研究報告集
- ・椎葉村『椎葉村史』、1994